部活動一直線

浅見　智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

部活動一直線

【Ｎコード】

Ｎ４１９９Ａ

【作者名】

浅見　智

【あらすじ】

超元気娘・日下ちとせが繰り広げる日常を描いた、学園部活、友情、恋物語！！

ｃｈａｐｔｅｒ１：超元気娘！！

晴れ渡る空――――

白い雲――――

少し強めの風が桜の花びらを舞い散らせる。
その淡い桃色が、真新しいセーラー服に映えている。
暖かな陽射しが心地よい。

四月某日――――
今日は巻園第一中学校の入学式である。
皆、緊張した面持ちで式の始まりを待っている。

そう、たった一人をのぞいては――――

「お母さぁん。もっと早く～。これじゃぁ、入学式そうそう遅刻だよぉ…恥ずかしいなぁ、もぅっっ。」

「…はぁっ……あ、…んたが、悠長に朝飯食べてたからでしょうがっっ！！」
呼ばれた母が息を切らせながら言う。

一方、ここは巻園第一中学校の体育館。
すでに、入学式は始まっているようだ。

「ねぇっ純ちゃん、ちとせ来てないよぉ？！」

「心配すんなって、紫月。あいつが何かやらかすのなんか、毎度のコトじゃん。」

純ちゃんこと楠　純奈は、何事もない様な顔をしている。
一方、紫月と呼ばれた少女は腑に落ちない様子である。

「何よっっ！！健全女子中学生に朝飯ぬけって言うの？大体、お母さんが寝坊するから――――ってお母さんっ？？！」

母は、通って来た道のずっと向こうを歩いている。

「もうっ！！お母さぁ～～～ん。」

『……ハハ〜』

chapter2：桜の木の下で

突然の笑い声に思わず振り向く。
すると、体育館付近の桜の木の下から学制服を着た男子が姿を現す。

「君、おもしろいね。名前は？」

少し茶がかった黒い髪。目や鼻のくっきりした端整な顔立ち。背は高めで、低くよく通る声。

（うわっ！カッコイイ…／／／）
自分でも顔が熱くなるのがわかる。

「あっ、日下ちとせです。」
（ヤだ、あたし。見とれちゃった…）

「ちとせか…。遅刻だよ。」

「あっあなたこそ。」

いきなり名前で呼ばれ動揺が隠しきれない。つい、どもってしまう。

「俺はいーの。出番、まだだし。校長のハナシとか面倒だし。それに俺、二年……
あっお母さん着たみたいだよ。」

（出番…？）

こちら体育館では、新入生呼名が始まっていた。次々と生徒達の名前が呼ばれていく。

「香山　翔」

「ハイッ」

みんなが驚くほど、大きな声で返事をして立ったのは一風、不良風のほっぺたに大きな傷がある少年だった。

「おっ、やったじゃん、紫月。香山と七連続同じクラス♪さては愛ですな。」

「もう、そんなんじゃないよ。ただの幼なじみだよぅ。」

そんな話をしているうちに、男子の呼名は終わってしまった。もちろん、まだちとせは来ていない。

「どうする～？純ちゃん、順番きちゃうよぉ？」

「だぁ～いじょうぶだって。絶対来るよ、アイツは。」

「霧島　円」

「ハイッ」

「日下　ちとせ」

「……」

「日下？一年三組、日下ちとせ」

返事がない。そのおかしい光景に皆がざわつき始める。

chapter3：噂の張本人、登場

「ハァイッッ！！！」

勢い良く体育館のドアが開き、皆が一斉にそちらを向く。
そこには噂の張本人、日下ちとせと肩で息をしている母親がいた。

「皆様、お静かにお願いします。日下さんはすみやかにお席に着いてください。」

「あっ、はい。遅れてすみません。」

笑ったり、あきれたりしている全校生徒の中を平然と通り過ぎ、席に着くちとせ。
一方、母は頬を赤らめ、ひきつった笑みを浮かべつつ、席に着く。

「ちとせ、おはよう。なかなか来ないから心配しちゃったよ。」

「でも、さすがだよなぁ。絶対何かやらかすと思ったけど、まさか入学式そうそうだとは……ッハハハ」

「おはよっ、紫月、純ちゃん。てか、笑わないでよ～。恥ずかしいじゃん！！それより、みんな同じクラスだね。やった＞＞」

「紫月がいるから香山もいるよ、ちとせ。」

「えっ、また紫月と香山、同じクラスなん？！やったじゃーん、紫月。」

「む〜〜〜。ちとせまでぇ。」

「静かにしてください。呼名を再開します。」

「楠　純奈」

「ハイッ」

ちとせ、純ちゃん、紫月の三人は、小学校低学年の頃から、ずっと一緒で、気の置けない友人である。

髪を肩まで伸ばし、その顔から性格がうかがえる様な明朗で活発な少女。いつも三人の盛り上げ役でトラブルメーカーのちとせ。

文武両道、容姿端麗、いわゆる才色兼備で、ストレートで腰まである黒髪がよく似合う、日本美人風でしっかり者の純ちゃん。

おっちょこちょいだけどやる気は満点。天然パーマがかった髪を二つに結っている。背も小さめで、小動物をおもわせる様な外見の持ち主。でも、どこかほぅっておけない紫月。

全く違うタイプの三人だが、だからこそわかり合える部分があり、とても仲が良い。

そして今回、三人は同じクラスになれたらしい。

「真下　紫月」

「はいっ」

ｃｈａｐｔｅｒ４：名前も知らない彼に振り回されて

新入生の呼名も全クラスが終わり、長く面倒臭い、校長先生や他の方々の話となった。

もちろん、ちとせがそんな退屈な話を聞くはずもなく、今朝の出来事を思い返していた。

――君、おもしろいね。――――

――ちとせか…。――――

彼に呼ばれた時に感じた胸の奥に刺激を受けた様な感覚。心地よさ。

（……一体、何だったんだろう――……）

ちとせがこの感情の意味を知るはずもなく。

（そーいえば、名前…、聞いてなかったな……）

――それに俺、二年……――――

彼についてちとせが知っているのは、その見惚れるほどの姿と自分の名前を呼ぶ声と二年という事だけ――

（また、会えるかなっ／／／）

そんなちとせの想いも知らず、入学式は取りとなった。

「最後に吹奏楽部による演奏です。吹奏楽部のみなさん、お願いします。」

すると、演奏の準備を始めた吹奏楽部員の中から、一人のポニーテールの女子生徒が出てくる。
おそらく部長だろう。
新入生に向かってあいさつを始めた。

そして、演奏が始まった。
一曲目は、人気のあるテレビ番組の主題歌だった。

ここで、やっとちとせは自分の世界から帰ってきて顔をあげた。

今までのちとせなら演奏などろくに聞かなかっただろう。
特に音楽が好きなわけではない。
楽器といえば、鍵盤ハーモニカやリコーダー、小学校六年生の頃、純ちゃんや紫月に誘われてやっていたマーチングのトランペットくらいだ。それも、紫月の様にうまかったわけでもなく、純ちゃんの様に音符がスラスラ読めたわけではない。本当にいっぱいいっぱいで、下手すれば一学年、下の子の方がうまかったくらいだ。
そんなちとせにもわかるほど、吹奏楽部の演奏により、場の空気は一変した。
先程までの緊張に包まれた空気は無くなり、穏やかな空気が流れ始めた。

「あっ…」
思わず声をあげてしまった。吹奏楽部員の中に今朝会った、ちとせの心から離れない彼がいたのだ。

（出番ってこの事だったんだ…）

彼の楽しそうに演奏する姿に自然と顔が緩む。

（あの楽器なんていうんだろう…？アルトホルンに似てるなぁ）

楽しい時間というものはあっという間に過ぎるもので、吹奏楽部の演奏は終了し入学式は幕を閉じた。

この後、ちとせが担任の先生に怒られたのは言うまでもない。

chapter5：新しい友達

怒濤の入学式が過ぎ、次の日――――

「おはようございます。」

一年三組に元気な声が響き渡る。
またもや、一人を除いて――――

「それでは、出欠席を確認します。近くの席でいない子はいますか？」

担任の先生は市井　梓先生といい、女子バスケット部の顧問であり、体育教師である。普段は穏やかで優しいのだが、厳しい面も持っている先生だ。

「先生～、日下さんがいませっ『います、いまーす。』

ガラリと教室のドアが開き、ちとせが入ってくる。

「日下さん、一年のこの時期から遅刻じゃぁ進学あぶないわよ？！」

「す、すいませーん……」

日下ちとせ、早くも浪人決定？！の瞬間であった。

ちとせは微妙な面持ちで席に着いた。

ちとせの席は廊下側の後ろから二番目で、その後ろが純ちゃんである。純ちゃんの隣は香山で、紫月の席は窓側の真ん中となっている。

そうこうしているうちに朝の会は終わり、いよいよ中学での初授業が始まろうとしていた。

…とは言っても、入学早々から授業らしい授業があるわけでもなく、午前の授業は、自己紹介や係り、委員会決め、掃除当番や給食当番決めで終わった。

係りはちとせ、純ちゃん、紫月の三人で書記係りとなった。

委員会はというと、ちとせの策略で純ちゃんが女子の学級委員となった。

当のちとせは香山と体育委員になり、紫月は図書委員になった。経緯はどうであれ、皆、自分にあった委員会に就くことができた。

掃除や給食当番は名前順で決めたので、紫月のみ分かれてしまった。

そして給食の時間――――

しょっぱなから給食当番のちとせは面倒臭そうに純ちゃんと食器を取りに行った。

給食当番がクラスメイト全員に給食を配り終えると、日直があいさつをし、皆一斉に食べ始める。

ここでおきまりの給食の取り合いという名の戦争がちとせと香山の間で勃発した。

そして、ちとせは本日、二度目の注意を受けた。

給食の時間も過ぎ昼休み、食器も片付け終え、ちとせは

「今日はツイてないなぁ…」

などと考えながら、純ちゃんと紫月の会話に耳を傾けていた。
「紫月は、部活どーすんの？」
「えっ？私は、色々見学してから決める。純ちゃんはバスケ続けるんでしょ？！」
純ちゃんは小学校の頃からバスケのチームに入っている。その活躍を紫月はずっと見てきた。
「もちっ！！！紫月も今日バスケ部見に行かない？」
運動神経の良い方ではない紫月は、迷っていたが、結局バスケ部を見に行くことにした。
「ちとせも一緒に行かない？」
突然、話をふられたちとせの脳裏に彼がよぎる。
「いや、あたしは…吹奏楽見に行く。」
ちとせの言葉に二人は少し驚いていたが、そんな二人の様子にちとせは気付いていなかった。ただ彼のことを考えていた。
もっと彼の事を知りたい。
自分の事を彼にもっと知ってほしい。
もう一度、話してみたい。あの声に名前を呼んでほしい。
そして、あの透き通るような目にもう一度映ってみたい――――
「あのっ日下さん、吹奏楽部見に行くの？」
突然、ちとせの前の席の少女に話し掛けられる。
霧島　円、入学式の呼名で確かそう呼ばれていた。
ショートヘアのよく似合う“カワイイ”という部類に入る少女だ。
「うん…」

とちとせが答えると円はパァッと顔を明るくさせて
「私も吹奏楽見に行こうと思ってたんだぁ。だけど一人じゃ行きづらくて。」
と言い笑った。

円はその親しみやすさで、すぐに三人と仲良くなった。

午後の授業は学校案内だった。
ちとせと円は音楽室の場所をチェックし、放課後、純ちゃんと紫月と別れたあと早速、音楽室にむかった。

ｃｈａｐｔｅｒ６：再会と決意

音楽室の前で二人で深呼吸する。
ちとせは柄にもなく緊張していた。

このドアの向こう側に本当に彼はいるのだろうか？

あったところでどうするというのだろうか？

そもそも、彼は自分の事など覚えていないかもしれない。
そんな途方も無い不安が脳裏をかすめる。

「ちとせ、開けるよ？！」

円の言葉にハッとして我に返る。

「う、うん…」

音楽室の扉がギギギッと音を立てゆっくりと開く。

「失礼します。」

音楽室に入り、辺りを見渡すが彼の姿はない。

い…ない……――――

頭が真っ白になり、それと同時に熱いものが込み上げてくる。

音楽室の中は入学式と同じ形で吹奏楽部員が並んでいて、それがよ

く見渡せる位置に何人かの見学者がいる。

「こんにちは～」

吹奏楽部員の感じの良い挨拶により円は緊張がほぐれたようだが、ちとせはそんなわけにはいかなかった。

「初めまして、見学に来てくれてありがとう～」

入学式の日、あいさつをしていたポニーテールの人がそう言って椅子をだしてくれた。

「今日はまだ初日だから、楽器は吹かせてあげられないんだ。ごめんね。」

今度は別の女の人に声をかけられる。

そして、それに便乗するようにポニーテールの人が

「でも、今から合奏するんで聞いてね。」

と言った。その時、再び音楽室のドアがギギギッという音をたてた。

「すいません、遅れました。」

その聞き覚えのある声に思わずちとせは振り返る。と同時にまるで時間がとまったかの様な錯覚にとらわれる。

あ…―会えた――――

自然に笑みがこぼれ、先程までの熱いものとは違う意味での熱いものが込み上げる。

「佐伯くーん、アンタは入学式もさぼって、今日も遅刻して本当にやる気あるの！？」
と言いながら、ポニーテールの人が近づいていく。
（サエキっていうんだぁ！！）
彼に会えた喜びと少しだけ彼の事を知れた喜びをかみしめる。
「すいませんっ、泉梨部長。今まで寝てて急いで来たんですよ。」
眉尻を下げて困った様に笑う彼。
「まぁ、いいわ。アンタのさぼり癖と遅刻癖には慣れたしね。合奏するから、さっさと楽器だして、音だしして。」
「は～い、ってあれ？！ちとせじゃんっ！！！」
「ふぇっ？！こ、こんにちは」
（突然、名前呼ぶからどもっちゃったよ～、でも、名前覚えててくれたんだっ／／）
「ちはっす、まぁごゆっくり。」
「佐伯～！！！一年生口説いてないで早くしなさぁいっ」
「うわっ！！はいっ、じゃ」

数分後ようやく合奏が始まった。曲目は入学式に吹いてくれた曲や有名なアニメソングのメドレーなどだった。

やっぱり演奏中の彼はどこか引き込まれるところがあり、目を奪われた。

合奏が終わると、見学していた一年生達がぞろぞろと帰っていく。そして、ちとせと円も。最後に部長さんが

「ありがとうございました～」

と微笑んでくれた。彼も

「よかったらまた来てください。」

と言った。

帰り道――――

ちとせと円は吹奏楽部に入部することを決意したのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4199a/

部活動一直線

2010年10月20日11時39分発行